

# Great Vowel Shift 序説

—その発端、過程、原因について—

三 輪 伸 春

## § 1. 発端について

どの研究者も、Great Vowel Shift の発端がどの長母音であったかについては、立場が歴史的であるならば、自らの研究から帰納的に決定できる。つまり、個々の長母音の推移の有様を調べ、比較し、もっとも早く推移を生じた長母音が、すなわち、Great Vowel Shift の発端となる。従って、どの長母音が発端であったかについては、特に述べ立てる必要はないといってしまうばそれまでであるが、Luick と Jespersen は、何故、一定の長母音が発端と考えられるかという根拠を示しているので、ここでは、Great Vowel Shift の発端がどの長母音であったか、また、その根拠の妥当性はどうかということを取り上げてみる。まず、Luick は [o:] > [u:] という推移が生じた地域でのみ [u:] > [au] という推移が生じていることから、発端は [o:] > [u:] であり、次いで、旧来の [u:] が二重母音化したと考える。前母音系列の場合も同様に、[e:] > [i:] が生じてから二重母音化 [i:] > [au] が生じたとしている。<sup>1)</sup>

これに対し、Jespersen は推移の発端は、高母音の二重母音化であると主張し、その根拠を2つあげている。<sup>2)</sup> 第1の根拠は、十六世紀の正音学者、John Hart が、ME *i*, *ū* にあたるところに、各々 [ei], [ou] という音を与え、ei, ou という綴り字を提唱していることから、<sup>3)</sup> ME *i*, *ū* はすでに二重母音化を生じていた。ところで、Hart は、低母音である ME *ā* については、*ā* という音を与えているがこれは疑いもなく“後舌 (back)”である<sup>4)</sup>、従ってまだ、ME *ā* の推移は始っていないと結論できる。また、第2の根拠は、も

し、低母音から Great Vowel Shift が始っていたとすれば、発端となった低母音がすぐ上の母音と同音化するだけであって、同音化した2母音以外の母音にとっては関係のないことであり、従って Great Vowel Shift は起り得なかったであろう。また、もし、低母音とそのすぐ上の母音と同音化しなければ、互いに接近することにはなっても、Great Vowel Shift を起させる程のものではない、逆に、発端を高母音の二重母音化と考えれば、二重母音化発生後、ME  $\bar{i}$ ,  $\bar{u}$  にあたる位置が完全に空白となり、この空白をうめるために上の方から順に推移が進行したと説く。<sup>5)</sup> この Jespersen の考えを補足すれば Jespersen が、Great Vowel Shift の発端を高母音  $[i:]$ ,  $[u:]$  の二重母音化と考えたのは、ME  $\bar{a}$   $[a:]$ ,  $\bar{e}$   $[e:]$ ,  $\bar{e}$   $[e:]$ ,  $\bar{i}$   $[i:]$ ,  $\bar{o}$   $[o:]$ ,  $\bar{o}$   $[o:]$ ,  $\bar{u}$   $[u:]$  が順序通り、推移すれば、ME  $\bar{i}$ ,  $\bar{u}$  は二重母音化して各々、 $[ai]$ ,  $[au]$  となりあとは、一段階ずつ上昇して、 $\bar{a} > [e:]$ ,  $\bar{e} > [e:]$ ,  $\bar{e} > [i:]$ ,  $\bar{o} > [o:]$ ,  $\bar{o} > [u:]$  となるべき推移が ME  $\bar{e}$  に限り、(便宜的表現を使えば)二段階上昇して、Prest. E. では  $[i:]$  となり、結局、ME  $\bar{e} > [i:]$  と同音化し、多くの同音異義語を生みながら、それでも、特に支障なく行なわれているという事実が念頭にあったために Great Vowel Shift 程の大規模な推移を生じるにはやはり、高母音の二重母音化による完全な空白と、その空白をうめようとする大きなエネルギーが必要であったと考えていたためと思われる。<sup>6)</sup> 従って、もし、Great Vowel Shift が低母音から始った仮定すれば、ME  $\bar{a}$ ,  $\bar{o}$  が発端となるが、ME  $\bar{e}$  と  $\bar{e}$  との同音化という事実を考え合わせれば、ME  $\bar{a}$ ,  $\bar{o}$  は各々、すぐ上の ME  $\bar{e}$ ,  $\bar{o}$  と同音化して推移はそれだけでとまり、全部の長母音の推移にまでは及ばなかっただろうと思われる。以上のように考えると、Great Vowel Shift の発端は高母音の二重母音化であったと思われる。更に、Jespersen は、自説を更に強固にするために、occasional spelling をも援用している。<sup>7)</sup> それによると ME では、spelling e は  $[e:]$  と  $[e:]$ , o は  $[o:]$  と  $[o:]$  とにあてられて用いられ広母音と狭母音の区別はなされていなかった。ところが、16世紀に、 $[i:] > [ai]$ ,  $[u:] > [au]$  という高母音の二

重母音化が生じた後には、spelling ie が [e:] , spelling ea が [ɛ:] , spelling oa が [ɔ:] を表わすように記述されている。このことから、spelling e はすでに [i:] に推移していたことが推定できる。逆にいえば、ME i が二重母音化してしまったので、元来 [e:] にあてられていた spelling e が [i:] を表わすようになっていたために、[e:] , あるいは [ɛ:] を表わす別の spelling ie, ea が用いられるようになったということになる。<sup>8)</sup>

以上のことから、Great Vowel Shift の発端は高母音の二重母音化であると Jespersen は主張する。稿者は、Jespersen の第1の根拠を有効と考えて、高母音の二重母音化を Great Vowel Shift の発端と考えたい。というのは、Jespersen の第1の根拠は Jespersen が (§3 でふれるように)、音韻推移を個々の音の、別々の推移とは考えずに、音韻体系というものを、後の構造主義者のように明確にはなかったにせよ、念頭において考えていたから出てきた根拠であり、<sup>9)</sup> 歴史的立場にしても、音韻体系を考えないでは音韻推移を十分に理解できないと考えるからである。

## §2. 推移の過程について

音韻史を考える場合、個々の音の推移の過程が無論問題となるが、その際、忘れてならないことは、音声の心理面の研究である。そこで、Saussure, Sapir<sup>10)</sup> に始まる構造主義の言語学者によって、言語や音韻の体系が心理的体系として説かれる以前の歴史言語学では、音韻推移の心理面をどのように考えていたかについて、生理面と共に考えてみたい。特に、心理面について、歴史的方法による研究者の誰もが前提としていることを、直接そのことにふれている Wyld 更には、Paul によって調べてみる。<sup>11)</sup> まず、生理(現象)面から。

Wyld は歴史の立場から考えた場合、音韻推移という現象をどのような態度で考えるかということ、古音価推定の諸方法の中に含めている。Wyld のあげている、そして一般に行なわれている古音価推定の方法は以下のようである。<sup>12)</sup>

1. 初期正音学者 (orthoepist), 正字法学者 (orthographer) の説明, 規範をもとにする。
2. 詩の韻, 主に脚韻をもとにする (meter, rime), 軽口 (pun), 同音反復 (jingle).
3. 異常綴字 (occasional spelling).

英語音韻史学者は, 以上のうち, 全部, あるいはどれかを選んで古音を推定してきた。ところで, 以上三種類の他に, Wyld は, もう1つ加えている。すなわち, historical consideration<sup>14)</sup> である。上記の三種類の方法 (あるいは, 史料) とはいささか趣きを異にするが, Wyld はこれを強く主張している。このことは音韻史研究の方法というよりは, むしろ, 「音韻を歴史的に研究する際の心構え」といった方が適切かもしれない。すなわち, Wyld は, それまでは, 往々にして考えられがちであったところの, ある音が他の音に推移する際には, ある一時期を境にして, 一勢に推移するという通念を排し, 推移は, 時間の上でも, 空間の上でも, 漸次的に生ずるものであり, 従って, 表立った推移の前後には, 推移以前の旧来の音と, 推移後に表面に現われる新しい音の共存がみられる,<sup>15)</sup> すなわち,

“New departures in pronunciation, therefore, are necessarily unconscious, and *sound change is gradual*.”<sup>14)</sup>

と主張しうる。この考えを Wyld は ME ā の推移を例にあげて述べている。<sup>15)</sup> これは Wyld が Great Vowel Shift の説明に入る前に言語史, 音韻史研究の態度として前置きしていることであるが, 同時に, 歴史言語学者としての Wyld が音韻推移の過程をどうみるかを示している。まず, Wyld 以前の研究者の態度を評して,

“In former days, when those great figures of English Philology Ellis and Sweet were in their prime, these men, and others who followed limpingly in their footsteps, believed it to be possible to construct, almost entirely from the accounts, a fairly exact chro-

nological table of vowel changes, and to say with confidence, such and such was the shade of sound in the sixteenth century, and so on.

として ME ā に関し、従来考えられていたところの、

ME	16thc.	17thc.	18thc.
ā	[æ]	[ɛ]	[ē]

という余りに図式的な考え方を排し、

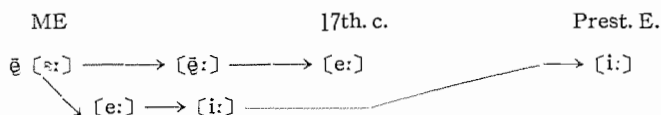
But I should know that this was rather dangerous table to make, neatly packed into separate periods, certainly coexisted in the same period, and overlapped into the periods before and after that to which they are assigned.

と強張している。そして、このように打ち出された言語史観、音韻史観が、実際の研究にもっとも明確に現われているのが ME ē と ME ē̄ の同音化に関する Wyld の研究であり、その成果である彼の説である。<sup>10)</sup>

ここでは、ME ē と ME ē̄ の同音化現象そのものについて詳述することは必要ないと思われるので、その概略を示すに留める。

ME ē と ME ē̄ の同音化について、Wyld 以前では、ME ē は、概略 M E [ɛ:] > [e:] > Prest. E. [i:] という漸次的推移をしたとされていた。ところが、ME ē̄ は、ある詩人たちによって ME ā, ai, ei と押韻されている時期があった。そのことは以下の証拠の示すところである。Please-days (Surrey), uncleane-maytayne (Spenser), dreams-Thames, mead-braid, maids-beads. (Drayton), sea-way, make-smake-speake (Waller), clean-Seine (Suckling), play-sea (Cowley), dream-shane, obey-sea, seas-sways, play-sea (Dryden), meat-say't, yeast-haste, seat-weight, dreams-streams, dream-name, cheap-rape, veal-ale, etc. (Swift), weave-take, eat-gate, eat-state, speak-take, great-state, shade-dead (Pope), breake-betake, speake-make (Sackville) これらの証拠か

ら判ることは、ME ē は ME ē とは押韻されず、ME ā, ai, ei と押韻されていることである。このことは、前述のように、ME ē が漸次的に [ɛ:] > [e:] > [i:] と推移したと考える従来の説と矛盾する。何故ならもし、ME ē が、[ɛ:] > [e:] > [i:] という漸次的推移をしていたならば、ME e と押韻されていた ME ā, ai, ei も等しく、Prest. E. では [i:] となっていなければならないからである。Wyld は、ME ē の推移が、従来の説のように漸次的なものではなく、実は、ME ē > Mod. E. [i:], ME ē > Mod. E. [e:] という原則的推移の他に ME ē > 16th. c. [i:] という方言形がありこれが 17th. c. 頃から、標準とされていた ME ē > [ɛ:] にとって代ったという説である。すなわち



と便宜的に図示される。このような、平行状態は、以下のような occasional spelling と詩人の押韻により証明される。<sup>18)</sup>

hylen (<MEhēlen, W. Gregory *Chronicle*), pryck ("preach"),  
 bryking ("breaking"), brykfast ("breakfast"), spyking ("speaking")  
 (以上, H. Machyn *Diary*)

lipe ("leap") (R. Ascham *Toxophilus*), bequived ("bequeathed"),  
 spich ("speech") (以上, Q. Elizabeth)

詩人の押韻では、

reach-besech, grene-clene (Surrey), besech-reach (Wyatt),  
 seas-these, streame-seeme, uncleane-weene (Spenser),  
 stepe-lepte, (steep) -leap (J. Skelton),  
 sweetness-greatness (Marston)  
 beat-fleet, these-seas (Drayton)  
 sea-she-be (Waller)

sea-these, seas-please, seize-please (Milton)

sea-be, sea-he, sea-these (Cowley)

see-free, meet-seat, bread-feed (Dryden)

cheat-meet, sease-these, great-meet (Swift)

seat-fleet, queens-means, sea-flea, etc. (Pope)

以上、相反する二種類の証拠から Wyld は以下のように結論する。<sup>19)</sup>

It appears from all this that the raising of the vowel (ME/ε:/) to [i] in some areas or classes was very early, that some words were pronounced according to this type by the good speakers (e. g. Q. Eliz.) as early as the sixteenth century, and that the poets know, and occasionally used this type. On the other hand it was not widely current, and may have been regarded as a vulgarism, until the second half of the eighteenth century.

さて、以上に述べてきたことから、歴史主義に立った場合に、音韻推移過程を現象面、つまり生理面をどのように考えるかということが多少とも明らかになったと思う。そこで、次には、歴史言語学の研究者の間では、音韻推移の心理面はどのように考えられていたかについて調べる。

この節の冒頭でふれたように Wyld は、その著、*Historical Study of the Mother Tongue*. 1906. (Murray). で、生きている言語は psychological aspect と mode of expression 即ち、sound との両面をもつとっている。<sup>20)</sup>ところが、Wyld のこのことについての説明は簡単にすまされており、特に、psychological aspect に至っては言及しただけで、全くという程説明がない、しかしこの本にみられる Wyld の考えは、実は、H. Paul<sup>21)</sup>の方法論ともいえる程、Wyld は Paul の系統を引いた考えをもっている。そして、言語には、psychological aspect と mode of expression の両面があるという考えも Paul により明言されているので、ここでは、言語史の、音韻推移の心理的側面を歴史言語学ではどのように考えられていたかを主に

Paul によってたどってみる。

発話に現われた音韻の連続は、第1に、運動神経の刺激とそれにより生じる筋肉の活動、それにより起こる発音器官の運動。第2に、それらの運動が必然的に伴う運動感覚。第3に、聞く者の脳中に起こる音響感覚。この最後の音響感覚とは、物理的、生理的刺激の消失した後も不変であるような心的作用即ち、心的過程ともいいうる「記憶心像」である。この記憶心像が音韻の変遷には極めて重要である。何故なら、その時、その時に、発せられた物理的、生理的刺激を記憶に留め、以前と変らぬ物理的、生理的調音運動を生ぜしめるのはこの記憶心像によるからである。（§33）

ところで、この記憶心像に記憶される単位は語ではあっても、語をその要素に、たとえばアルファベットの記号のようなものに分析することは極めて困難である。何故なら、語は無限に切れ目のない音の連続であって、言語学で分析するのは、この音連続の特徴ある部分のみを抽出するということだから。が、その特徴ある部分が度重なる運動により感覚を通じて記憶心像にその運動に連合した反射として結合関係を生む。この時、1つの運動によりくり返えされながら生じる音は記憶心像にその痕跡を留める。その時、その記憶心像は、運動により生じた音が以前の音と同じかどうかを確証する。この確証作用の意識が存在するために、個人個人の発音は記憶心像の統制をうけ誤りを訂正される。ところが、この統制力にも限界のあることは調音点、調音位置の無限の多様性を考えればすぐわかる。調音位置の多様性に限らず、音の長短、高さ、強さなどの要素が加われば、音韻の推移が記憶心像の統制力を越えて発生することは十分考えうる（§36）。この時、音韻の推移が他のどの方向にもまして一定方向に向うことは、話す者にとって、何らかの点で都合だからであり、それより他には考えられない。その際、具体的にその推移の現われるのは、生理的、物理的面ではあるが、根本的には、心理面なのである（§38）。以上が、音韻推移に関する歴史言語学者 Paul の考えである。

さて、実際の発話に現われる無限に連続する音韻の特徴ある部分がくり返え



されることにより、記憶心像に固定した音表象を生むことはさきに述べた通りであるが、更に、一步進んで、音韻推移の上で、どうしても忘れてはならないことは、音韻の記憶心像、音表象は同一言語内の他の記憶心像、音表象と同位排列 (Coordination) をなすということである。このことは即ち、音韻の体系 (System) の存在ということであり、対立関係の存在ということに他ならない。

以上に述べてきたことを考慮に入れて初めて Great Vowel Shift がその作用を全長母音に及ぼした究極の原因が明らかになる。即ち、体系をなす各音韻は対立関係にあり、その体系を堅持している以上、1要素たる1音韻が何らかの原因で推移をさけられない状態に立ち至った時 (本稿 § 3. 参照)、体系内に異化作用が生じる。このような異化作用が重なって生じたのが、即ち、Great Vowel Shift なのである。Jespesen は、このような手順を経た説明はしていないが、体系を前提とする構造主義の先鞭をつける考えを示している。<sup>22)</sup> その考えを Great Vowel Shift を例にあげて説明している。

	ME		Eliz.		
1.	bite	bi'tə	beit	bait	(bite)
2.	bete	be'tə	bi't	bi't	(beet)
3.	bete	bɛ'ə	be't	bi't	(beat)
4.	abate	a'ba'tə	a'bæ't	ə'beit	(abate)

という推移は以下のような手順を経た、

- I. 2. の [e'] が [i'] に推移した時、すでに、1. の [i'] は [ei] へ推移していた。
- II. 4. の [a'] は、3. の [ɛ'] が [e'] に推移するまでには [æ'] にはなれなかった。そして以下のような説明を加えている。

The four vowels, as it were, climbed the ladder without ever reaching each other—a climbing which took centuries and in each case implied intermediate steps not indicated in our survey. No

clashings could occur so long as each category kept its distance from the sound above and below, and thus we find that the Elizabethans as scrupulously as Chaucer kept the four classes of words apart in their rimes.

音韻推移を物理的, 生理的側面からだけ考えていたり, 個々の音韻を別々の推移として扱っていると以上のような解釈は生れてこない。このようにして, 音韻推移の心理面を考慮しての過程が多少とも明らかになったと思う。Jespersen は, このような異化作用の連続的推移を equidistance and convergent change と呼ぶ。<sup>23)</sup>

### § 3. 推移の原因について

§ 1. では Great Vowel Shift の発端, § 2. ではその推移の過程, について調べてきたが, 最後に付け加えるべきは, それでは一体, あのような大規模な母音推移を惹き起したそもそもの原因は何であったかということであろう。§ 1. では Great Vowel Shift が高母音の二重母音化に始まった (ME i, ü > [ai], [au]) とする Jespersen の説を支持した。その根拠はすでに述べた通りである。ここでは, Great Vowel Shift の原因について考えるが, やはり, Jespersen の説を裏づける結果となった。

Great Vowel Shift の原因を述べるために, まず明らかにしておかなければならない現象がある。それは OE から ME にかけての開音節の短母音の長音化である。

例えば<sup>24)</sup>

	OE		e. ME		ME
e>ɛ:	stelan	>	stelen	>	stēlen
a>a:	bacan	>	baken	>	bāken
o>ɔ:	flotian	>	floten	>	flōten

と図示できる。その他に,<sup>25)</sup>

OE [e] > ME [ɛ:] > Prest. E. [i:]

bead (OE *bedu*), tread (*tredan*), meat (*mete*), eat (*etan*),  
break (*brecan*), weave (*wefan*), bequeath (*bicweðan*),  
besom (*besema*), meal ("flour" *melu*), bear (verb, *beran*),  
pear (*pere*, -u).

OE [a] > ME [a:] > Prest. E. [ei]

ape (OE *apa*), lade (*hladan*), ladle (*hlædel*), shade (*sceadu*),  
hate (*hatian*), shake (*sceacan*), snake (*snaca*), acre (*oecer*),  
name (*nama*), shame (*sceamu*), lane (*lane*), knave (*cnafa*),  
raven (*hræfen*), shave (*scafan*), bathe (*baðian*),  
graze (*grasian*), hazel (*hæsel*), tale (*talū*), ale (*ealu*).

OE [o] > ME [ɔ:] > Prest. E. [ou]

hope (OE. sub. *hopa*, vb. *hopian*), open (*openian*),  
throat (*þrot*, -u), float (*flotian*), mote (*motan*), bode (*bodian*),  
smoke (sub. *smoca*, vb. *smocian*), yoke (inf. *geocu*), broke (n)  
(-broc (en), spoken (-sp(r)ecen), 現在の spoken は break との  
類推), soak (*socian*), cove  
stove (*stofa*), over (*ofer*), cloven  
nose (*nosu*), hose (*hosa*), chosen (*coren*, OE の活用では, *cēosan*  
—*cēas* (pl. *curon*)—*coren*, Chaucer では, *cheesen*—*chees*—*chosen*,  
現在の chosen の ch- は元来の c [k] が他の形の ch- に, -s- は, 元  
来の -r- が他の形の -s [z] - に, 類推により代えられたもの)  
coal (*colu*, pl.), hole (inf. *hole-*), foal (*fola*) sole (*sol*),  
shoal (*scolu*), stolen (*stolen*), (be)fore (*biforan*, *beforan*),  
forlorn (*forlosian*), froze (*froren*), bore (*borian*)

ところが、同じ条件下にありながら、i と u 同じようには長音化しなかつ

た。第1に、時期が遅れたこと、第2に、長音化自体散発的にしか生じていない。時期についていえば、<sup>26)</sup> OE e > ME [ɛ:], OE a > ME [a:], OE o > ME [ɔ:] が1200—1250年の間であるのに対し、OE u, i の長音化は、1250—1350年の間に起っている。その例についていえば<sup>27)</sup>

OE i > OE ē > prest. E. [i:].

glede (OE glida), weet (witan), week (wicu), weevil (wifel),  
evil (yfel), beetle (bitela), speer (spyrian)

OE u > ME ū > Prett. E. [u:].

wood (OE wudu), door (dutu), love (lufu) だけであり、それもOE e, a, o の場合のように完全ではない。この現象の説明は種々なされたが、この現象を System としての英語の母音組織を考え、更に Great Vowel Shift の原因に結びつけて考えたのは André Martinet である。<sup>28)</sup> Martinet の考えによって、上記の開音節母音の長音化とその例外、そして Great Vowel Shift の原因を探れば以下のようになる。

まず、Martinet は isochronie という概念を立てる。isochronie とは、量による distinctive feature の表示をなくすることにより生ずる現象である。たとえば、古典期のラテン語には母音 a を量によって弁別する習慣があった。(ǎ, ā) ところがアクセントをもった開音節の a は俗ラテン語に至って古典期の a より長くなった。一方アクセントのない音節中の ā と、閉音節の ā は俗ラテン語では、古典期の ā より短くなった。前者の例としては malum, 後者の例としては mālōrum, bónā, āctus がある。こうして、古典ラテン語の a と ā とは同じ量になってしまった。このような現象を isochronie という。ところで、この現象が、アクセントと重子音 (gemination) をもった言語に生じた場合、特にアクセントの直後の重子音は消失する傾向がある。たとえば、á-ta と át-ta の場合、isochronie により、á-ta の á- は同じ短母音でも比較的長く現われ、át-ta の á- は比較的短く現われる。その時、両語

の弁別は  $\bar{a}$ ,  $\check{a}$  の交替により示されるようになり重子音の果たす役割はなくなり、アクセントのせいもあって、重子音は消失し、結局、 $\acute{a}$ -ta >  $\bar{a}$ -ta,  $\acute{a}$ t-ta >  $\acute{a}$ -ta となる<sup>30)</sup> が、このような現象は、音韻組織に多大の影響を与えずにはおかない。そして、OE から ME にかけての開音節の短母音の長母音化現象は正しくこれである。そこで、それでは、長音化が完全に実現しなかった、OE  $i$ ,  $u$  はどう説明したらよいのか。Martinet は、この例外を以下のように説明する。

OE  $e$ ,  $a$ ,  $o$  の長音化が生じた段階での英語の母音組織は下図のように示されうる。<sup>30)</sup>

$i$ $\check{i}$	$\check{u}$ $\bar{u}$
$e$	$o$
$e$   $a$	$o$   $a$

ところで、 $o$ ,  $\check{u}$ ,  $\bar{u}$  と

$e$ ,  $\check{i}$ ,  $\bar{i}$  の

音色を考えれば、その実

現する持続時間の長さは、

口の開きの大きい順、即ち、 $e > \check{i} > \bar{i}$ ,  $o > \check{u} > \bar{u}$  でなければならない。<sup>31)</sup> にもかかわらず、 $\bar{i} > \check{i}$ ,  $\bar{u} > \check{u}$  のままであり、 $\check{i}$ ,  $\check{u}$  がアクセントのある開音節にあっても、 $e$ ,  $a$ ,  $o$  とちがって長音化しなかったのは、 $\bar{i}$  と  $\bar{u}$  とが対立関係にあった。即ち、 $\bar{i}$ ,  $\bar{u}$  の長さは関与的(*pertinente, relevant*)であった。従って、 $\check{i}$ ,  $\check{u}$  は長音化しなかった。 $\check{u}$ ,  $\bar{i}$  が遅れて長音化したのは、*gemination* (重子音) が消失してからであった。たとえば、OE *wicu* の  $-\check{i}$  は開音節にあって長音化した (Prest. E. *week*) が、これは、すでに *gemination* を消失していた ME *wicke* (Prest. E. *wick*) との同音異義化をさけるのに役立った。<sup>32)</sup>

さて、 $\bar{i}$ ,  $-\check{i}$ - $e$ ,  $\bar{u}$ - $\check{u}$ - $o$  の対立であるが、たとえば、上図中、対立しているのはその二組だけであるが、音韻体系内で量による対立が二組だけに限られた場合、それらは消失するのが常である。<sup>33)</sup> そこで、閉じた音にしてはすぎた量をになっていた (つまり、前述のように、音色からいって、各母音の量は  $e > \check{i} > \bar{i}$  でなければならないのに  $\bar{i}$  が  $\check{i}$  より大きい量をになっていた) と

ころの *i* は二重母音化して、[i:] となった。従ってこの二重母音化が Great Vowel Shift の発端であり、原因である。Jespersen は、/i:/ は /ii/ をへて、1500年頃、/ei/ となったと説いている<sup>34)</sup> が、その二重母音化の萌芽は、1300年頃と推定される。<sup>35)</sup> また、*i*, *ū* の二重母音化により、*i*-*ī*-*e*, *ū*-*ū*-*o* の対立関係から開放された、開音節中の *i*, *ū* はこの頃、散発的にはあるが長母音化した(本稿, P47)。

## 注

- 1) Luick, K. *Untersuchung zur englischen Lautgeschichte*. 1896, p. 78.  
但し, Jespersen *Modern English Grammar*. I. 8. 12 による。
- 2) Jespersen, O. *Modern English Grammar*, (Ejnar Munks gaard). 1909. (Allen). 1961. vol. II. 8. 13, 8. 14.
- 3) Hart, J. *An Orthographie*, 1569. (英語文献翻刻シリーズ, 南雲堂 第6巻)  
Hart が与えている発音, 綴り字については, この巻の末尾につけてある, 荒木一雄教授の解説によって, 本文の該当箇所を参照するとよい。
- 4) Hart, J. *op. cit.* p. 75.  
Jespersen, O. *op. cit.* 8. 13.
- 5) Jespersen, *op. cit.* 8. 14.
- 6) ME *ē* と ME *ē̄* の同音化による同音異義語については Jespersen, *op. cit.* 11. 74. 参照。尚, ME *ē* と ME *ē̄* の同音化の過程については, § 2 で別に述べる。
- 7) Jespersen, *op. cit.* 8. 14, 3. 241~3. 243.
- 8) 但し, この occasional spelling による証拠は殆んど無効に近いように思われる。というのは, たとえば, Wyld (*History of Modern Colloquial English*, p. 206.) による限り, この頃, *ie* と綴られた語は以下の3語だけだからである。  
sien “seen”, indied “indecd”, 以上 *Creation of Knight of the Bath*, (1494), fried “freed”, *Letters to James VI* (1582-1602).  
しかも, これらの例は, Wyld では ME *ē̄* が [i:] に推移したことを示す, *i*, *y* という occasional spelling の例と共にあげられている。一方, Jespersen は, *ie* が [e:] を表わす例をあげていない。
- 9) Jespersen, *op. cit.* 1. 61.  
… I do not follow the fates of any one single sound through the centuries, but arrange the changes that have been taken place in the

- sound-system as a whole as far as possible in a chronological order.
- 10) Saussure, F. de. *Cours de linguistique générale*. (Payot). 1916. 特に chap. III § 2.  
Sapir, E. *Language: An Introduction to the Study of Speech*, 1921. (Harcourt). 1921. p. 57.  
“Sound Patterns in Language”, 1925, *Language*, vol. I.
- 11) Wyld, H. C. *Historical Study of the Mother Tongue*, (John Murray). 1906. p. 11, p. 13.
- 12) Wyld, *A Short History of English*, (John Murray). 1914. § § . 213~216.  
尚, 以下を参照。  
Kökeritz, H. *Shakespeare's Pronunciation*, (Yale). 1953. pp. 15~35.  
荒木一雄, 「英文法—理論と実践—」, (研究社), 昭和41年, 第Ⅲ部, 特に pp. 212~215.
- 13) Wyld, *A Short History of English*, p. 20.
- 14) Wyld, *op. cit.*, p. 45.
- 15) Wyld, *History of Modern Colloquial English*, pp. 189~191.
- 16) 但し, Dobson, E. J. *English Pronunciation 1500—1700*, § § . 107~109.  
Kökeritz, *op. cit.*, pp. 194~196.
- 17) Wyld, *A Short History of English*, § 232.  
ちなみに, ここにあげられた詩人たちの生存年は, 最初が Surrey で 1517—1547, 次いで Spenser, 1552—1599, 以下順次下って, Swift, 1667—1745, Pope, 1668—1744, Sackville, 1827—1908 である。
- 18) Wyld, *A Short History of English*, W. Gregory, *Chronicle in Historical Collections of a Citizen of London*, (1467年以前)  
H. Machyn, *Diary*, (1550—1553),  
詩人では, Surrey, 1517?—1547, から順次下って, Pope, 1668—1744 に終る。
- 19) Wyld, *A Short History of English*, § 232 (2)
- 20) Wyld, *Historical Study of the Mother Tongue*, pp. 11~13, pp. 55~72.  
〃, *A Short History of English*, § 12.
- 21) Paul, H. *Prinzipien der Sprachgeschichte*, (Niemeyer). 1880., 1920.<sup>5</sup>  
訳は, 福本喜之助訳「言語史原理」(講談社), 昭和41年による。  
以下, 本文中, カッコ内の数字は Paul の該当箇所を示す。
- 22) Jespersen, *Language*, (Allen). 1922. p. 284. 尚, 注 9) 参照。
- 23) 尚, Wartburg, W. von, *Problems and Methods in Linguistics*, (Blackwell). 1969. p. 55, 参照。

- 24) Prins, A. A., *A History of English Phonemes*, (Leiden). 1972. § 3. 45.  
 25) Jespersen, *Mod. Eng. Gr.* I. e, 3, 231. a, 3. 34, o, 3. 553.  
 26) Prins, *op. cit.*, 3. 47.  
 27) Jespersen, *op. cit.*, 4. 212~4. 216. Prins, *op. cit.*, 3. 51.  
 28) Martinet, A. *Economie des changements Phonétiques*, (Francke). 1955.  
 10. 1~10. 11.  
 29) Martinet, *op. cit.*, 10. 1.  
 30) Martinet, *op. cit.*, 10. 7.  
 31) Martinet, *op. cit.*, 10. 6.  
 32) Martinet, *op. cit.*, 10. 8.

Gemination の消失の年代は明確ではないが, wicu の -i- の長音化は, wicke と同音異義化を生じなかったという Martinet の考えからすれば, 1300 年頃には, 開音節の -i- が長音化したのだから, この頃には gemination の消失は少なくとも一部ではすでに起っていたとしなければならない。でなければ, wicu (>Prest. E. week) と wicke (>Prest. E. wick) とは同音異義語になっていたはずである。尚, gemination は, 普通, 語尾の -e の消失との関連で説かれた。それについては, Luick, K., *Historische Grammatik der englischen Sprache*, 1 Band II Abteilung, (Tauchnitz). 1929, (Blackwell). 1940. § 753. 1, 参照。

- 33) Martinet, *op. cit.*, 10. 7.  
 34) Jespersen, *ob. cit.*, 8. 21.  
 記号は原著のまま。  
 35) Martinet, *op. cit.*, 10. 7.